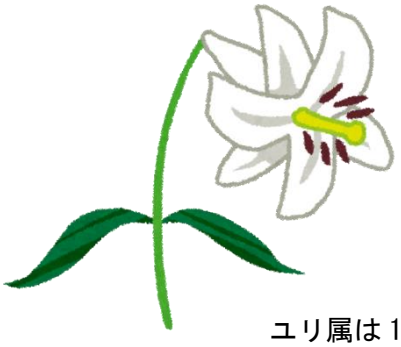


品質カイゼン室の花のソコが知りたい！

ユリ（分類）編

ユリ属は 100 種類以上もあり、現在も多くの品種改良が重ねられています。
オリエンタルユリ・LA ユリ・LO ユリ・OT ユリ・アジアティックユリ・・・・
とユリってどうしてこんなにも種類があるのでしょう？
そこで！今回はユリの分類と来歴についてお伝えします！

ユリのアルファベット　L・A・O・T

ＬＡユリやＯＴユリなど〇〇ユリの前にあるアルファベットＬ・Ａ・Ｏ・Ｔ

それぞれの意味をおさらいしていきましょう。

L ロンギフローラム

Longiflorum

＝長い形

筒状花から日本では
テッポウユリと呼ばれ
ています。

A アジアティック

アジア原産

別名：スカシユリ
花弁と花弁の間に
隙　間（　す　か　し　）
がありますね。

O オリエンタル

Oriental＝東洋

東洋＝日本

日本原産種
西洋からみて日本は
東洋であることから

T トランペット

トランペット咲

原産地：中国　四川省
病害に強い
イエロー系

ＬＡＯＴのだいたいの雰囲気感じて頂けたでしょうか。次はそれぞれの品種を画像とともにご紹介します！

L：ロンギフローラム

L：プチホルン

L：エンゼルホルン

L：ピュアホルン

光沢のある、純白の色からヨーロッパへ導入された際、「Easter（イースター） Lily（リリー）」としてキリスト教の復活祭や聖母マリア様の花として愛されています。
日本では沖永良部島での生産にて、100 年以上の歴史があります。

A：アジアティックユリ

A：プチエトワール

A：プチロゼ

TA：ゴールデンエラ

10 cm～15 cm程度の小さめの形、多くの花色を持ち、花の向きが上向きなものが多く、芳香が弱いのも特徴です。

TA ハイブリッドも近年開発されました。

T：トランペット

×

A：アジアティック

T：トランペット咲の鮮やかな色に
A：アジアティック
の上向きが魅力ですね。

O：オリエンタルユリ

オリエンタルユリは

大輪の花 に

華やかな香り が特徴

その豪華さはまさにユリの女王！

育種技術の革新により自然交配では実現不可能な
ユリの品種が誕生しています。
少しご紹介しますね。

Ｏ：シベリア

少し小さく、手ごろな大きさへ

ＬＯハイブリッド

↑

Ｌ：ロンギフローラム
×
Ｏ：オリエンタル

ＬＯ：ポーラ

Ｌの配合によって
オリエンタルの風味に
手ごろな大きさ
ちょうど良い大きさのため
より身近な存在に！

イエローやオレンジなど新たな色が仲間入り！

ＯＴハイブリッド

↑

Ｏ：オリエンタル
×
Ｔ：トランペット

オリエンタルとトランペットから
オリエンペットとも
呼ばれたりします。

ＯＴ：コルコバード

Ｔの配合によって
色のバリエーション増加
今までオリエンタルユリは
白やパステルピンク
の色合いが主でしたが、
トランペット咲との配合により
イエローやオレンジなど
新しい色が増えてきました！

LA ユリ

L：ロンギフローラム　×　A：アジアティック

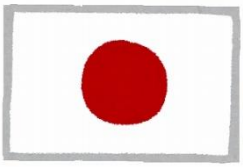
LA：イエローダイヤモンド

LA：ザネラ

LA：パーティダイヤモンド

L：ロンギフローラムの大きさ　・　A:アジアティックの上向き　・　多くの色のバリエーション

LA ユリの魅力はその扱いやすさと栽培しやすいところです。
流通量は年々伸びていき今ではアジアティックの４倍の流通量を持ちます。
余談ですが、LA ユリを最初に見たとき、「ロサンゼルスと関係しているのかな？」と浅はかにも思っていました・・・が、関係ありませんでした。
むしろ LA ユリはオランダや日本にて育成されています！



球根

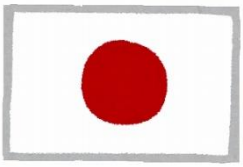
それぞれの花を見て頂いたところで
球根にも違いがあるのでご紹介したいと思います！

上の白いものが LA ユリの球根

下 2 段がオリエンタルユリの球根です。

球根でもこんなにも差が！
面白いですよね♪

切花ユリの原産地　日本



日本のユリを世界のユリにしたのは江戸時代に来日し、その美しさを欧州に伝えたドイツ人医師のシーボルト、東インド会社の医師ツンベルグです。

欧米にもマルタゴンハイブリッドやユーロ・コーカシアンハイブリッドとユリは存在していましたが、比較的下向きに咲き、花も小さい花形ばかりでした。

※すべてマルタゴンハイブリッドの品種たちです。

オリエンタルやロンギフローラム（テッポウユリ）のような大きく上向きのユリを日本で見たとき、彼らは驚き、母国の人にも見せたいと強く思ったことでしょう。

1794 年にテッポウユリが欧米に紹介され、19 世紀初頭にはイギリスに導入されます。
1873 年にはウィーン万国博覧会、1884 年にはペテンブルグ万国博覧会にてテッポウユリが出展され、その純白の美しさからキリスト教の復活祭の象徴として用いられるようになり、「Easter（イースター） Lily（リリー）」の名を手にしたのです。
このようにして欧米に紹介されたユリたちはその美しさから欧米諸国でも愛され、求められるようになり、1871 年日本からヨーロッパへ球根が輸出されるようになったのです。
当時の日本においてユリは生糸と同様に
外貨獲得手段のひとつでもあったのです。

200 年前、ユリ球根の輸出国でもあった日本でしたが、現在切花生産に用いる球根の多くはオランダから輸入したものが多くなっています。

世界でのユリ

　ユリはキリスト教において聖母マリア様とともに描かれることが多いです。
左下の絵は 1489 年ボッティチェリ作「受胎告知」、右下の絵は 1590 年エル・グレコ作「受胎告知」です。
大天使ガブリエルの左手に注目！どちらの絵も白ユリを携えています！
　この白ユリは原産地がヨーロッパ南西部や地中海沿岸・コーカサス地方であるユーロ・コーカシアンハイブリッドに属するマドンナリリーと考えられています。
　あの有名なレオナルド・ダ・ヴィンチ作の受胎告知でもユリは描かれ、マリア様の純白を表すと解釈されています。今度マリア様の絵を見る機会があったら白ユリを探しちゃいそうです！

1489　ボッティチェリ　「受胎告知」

1590　エル・グレコ　「受胎告知」

　ユリは日本・中国・北アメリカ・東欧・西欧と北半球で生息していますが、切花として楽しませてくれているのは日本原種が多いことに筆者は意外！と感じました。
今回はユリの分類と来歴についてでしたが、次回はそれぞれのユリの栽培についてお伝えしたいと思います。

参考資料

柴田道夫　（2016）「花の品種改良の日本史」悠書館
今西英雄　（2006）「ユリをつくりこなす」農文協
清水基夫　（1986）「日本のユリ」新光社

画像提供

株式会社中村農園様

株）大田花き
品質カイゼン室